



第八十二号 会報 浄土真宗 太陽の会

「春季彼岸会」

三月二十二日(土)に太陽の会本堂にて春季彼岸会法要を執り行いました。

お彼岸は西方のはるか彼方に西方極楽浄土があり太陽が真東から登り真西に沈む事で太陽の道しるべができるとされ、仏道修行に良い時期として六波羅蜜を中心にした修行が行われました。

この様な現世(此岸)と西方極楽浄土(彼岸)を中国の高僧善導大師が私たちに教え伝えてくださる二河白道があります。その絵図には、上方(西)に阿弥陀如来、観



音菩薩、勢至菩薩が描かれ「汝一心に正念して直ちに來たれ」とおっしゃっています。下方(東)にはお釈迦様が描かれ「この道を尋ねて行け」と背中を押してください。その西と東にまつすぐな白い細い道が繋がっています。その上に人が描かれ周りには水の海(貪りや執着の欲)が右側に広がり、火の海(怒りや憎しみ)左側に描かれ盗賊や獣が周りを取り囲みます。周りに惑わされることなく阿弥陀如来の導き釈迦の後押しにより白道を真つすぐに歩むと私たちは悟りの彼岸である西方極楽浄土に到達することができます。お彼岸のお参りで亡き方に思いを寄せてそのご恩に感謝いたしました。

「報恩講」

報恩講は阿弥陀如来の本願のおこころを明らかにしてください。親鸞聖人の遺徳を偲び、そのご恩に感謝の思いからお勤めされる、浄土真宗でもっとも大切な

法要となります。お寺で法要するだけではなく自宅でもお勤めされるなど「親の法事はもちろん大切だけど、報恩講を勤めるのはさらに大切にしています」とまて言われています。親鸞聖人は「命あるものは全て皆、これまで何度となく生まれ変わり死に変わりしてきた中で、父母であり、兄弟であったのです。この世の命を終え、浄土に往生してただちに仏となり、すべての人を救わなければならぬ」とおっしゃっています。父母は今生での育てのご恩がありますが、命の連続を考えるなら多くの命の繋がりと、私のすむべき先のお浄土への道を示してください。私たちが大切なのは、親鸞聖人です。私たちはそのお導きに感謝して「報恩講」を大切にお勤めしなければならぬのです。



「竜王院 読経会」

太陽の会では、毎月11日前後を竜王院読経会としてご参集の皆さまとお経を称え、法話を拝聴しています。今年は『無量寿経』に説かれる阿弥陀仏が法蔵菩薩として修行されていた時にたてられた一切の衆生を救うための「四十八願」をお話しいただいています。

「四十八願」の中で4つ目にあたる「私が仏となるならば、わたしの治める仏土の人々の外見に、美しいものと醜いものの差異があるならば、私は悟りを得ない」というものです。それぞれ一人ひとりが違う悩みを抱えつつも、その悩み迷いを晴らすための阿弥陀仏でありたいと誓ってくださいています。浄土の世界でも外見に差異はありますが、差をつけて判断することはないと言う事です。変わりゆくものを変えまいと、意固地になるのが私たちです。だからこそ、差を問うようなことはしないと、この誓願をたてられたのではないのでしょうか。



「合同研修会 ～初転法輪～」

お釈迦さまが初めて仏教の教義を説かれた出来事を初転法輪といいます。

その時に説かれたのが「四諦」「中道・八正道」だと言われています。これは、この世の真理であり苦しみから解脱する為の実践が八正道なのです。

四諦の「諦」とは真実という意味で、
苦諦（人生は苦しみであるという真実）二、集諦（苦の原因は自己の欲望・煩惱であるという真実）三、滅諦（一切の欲望・煩惱を断じ滅し、それらから解放されると悟りの境地に達することができるという真実）四、道諦（この悟りの境地に達する実践が八正道という真実するといふ真実）すなわち①正見（自己中心的な見方や偏った見方をせず、正しい物の見方を心がけること）②正思惟（正しく考え決意すること）③正語（正しい言葉を使い嘘、偽りないこと）④正業（正しい心で正しい行いをする）⑤正命（人に迷



惑をかけず正しく生活を送ること）⑥正精進（正しく励み努力をすること）⑦正念（雑念を払い心を安定させ真理を求める心を忘れないこと）⑧正定（精神を統一して安定させること）以上が八正道の内容となります。この教えを実践する事で悟りにたどり着くことができるのです。

「令和七年 行事計画」

「令和七年 行事予定」

○本山（福山）

・ 降誕会 五月二十一日(水)

開式 十時半

・ 盂蘭盆会 八月十四日(木)

開式 十時半

○竜王別院（広島）

・ 読経会

五月十二日(月) 九時

六月十一日(水) 九時

七月十一日(金) 九時

八月 八日(金) 九時

○川上太陽霊園(鹿児島)

・ 盂蘭盆会 八月九日(土)

開式 十時



「クイズ浄土真宗」

Q 浄土真宗の現世利益とは？

- ① 自分の思い通りになる
- ② 靈感が働き、祟られない
- ③ 付和雷同諸仏に護られ、恐怖が去り、心が安らぐ

浄土真宗の現世における利益は、病気が治るとか、試験に合格するとかといった対処法で、実現されるものでもありません。もつと基本な、生きる心の土台が与えられて実現する人生の充実感や、安心感といった利益です。これを現生十種の益と言います。

具体的には、諸仏や神々に護られて、不安や恐怖が取り除かれ、心に喜びが満ち溢れてきます。また、仏の徳が身に具わり、悪を善に転じていくことができます。さらに恩を感じて、慈悲深い心になって行動することができるようになるのです。

そして、もつとも基本となり利益として、将来、浄土に生まれることが約束された絶対安心の境地にさせていただくことです。

それは、合格通知を受け取った受験生のようなもので、しばらくすれば、希望の大学に行けます。そのように、この人生が終われば、次は間違いない浄土に往生できるのです。

そんな心はバラ色の人生が開かれるというのです。本当のご利益は、自分のそのときどきの思いや願いを実現させることではなくて、恐怖や不安が取り除かれ、本来の自分らしさが発揮できることではないでしょうか。



Q 浄土真宗の現世利益とは？

クイズの答え・③

「歎異抄を読む」 たんにしょう

『歎異抄』は、親鸞聖人が亡くなった後、門弟の間に真実の信心に背く異議が生じたことから、聖人から口伝を受けた著者が、同心の行者の不審を除くために著した親鸞聖人の言語録です。



慈悲に

聖道・浄土のかはりめあり

釋蓮如（『歎異抄』第四条）

「できるだけのことを

させていただく」

自分の損得を考えず、本当にすべての人を慈しむという聖道門の慈悲を实践することは難しい。「この世では不完全な慈悲しか持てないからこそ、できるだけのことをさせていただく」という気持ちをお忘れないうにしよう。それが浄土門の慈悲である。もそれが出来ない私こそ阿弥陀さまの救いのめあてなのである。

「一月～四月のことば」

太陽の会では、館内入口・本堂入口に「月のことば」を掲載させて頂いております。お経は難しいと思われる方もいらっしゃると思いますが、身近なやさしいお言葉として皆様のお心で味わって頂けたら幸いです。

【一月のことば】

いつでもどこでも誰でも
たすける行 それは念仏

「竹中智秀」

親鸞聖人は「すべての世界に至り届いている阿弥陀仏の無礙光は、無明の闇を明るく照らし、信心を得て阿弥陀仏の救いを喜ぶ人に、必ず仏のさとりを開かせるのです」と示されています。つまり、時と処と人のあり方を選ばれない救いはたらきが念仏なのです。

あらゆる衆生の迷いを我がこととして引き受け、背負い、見捨てることができないう大悲心として成就され十方衆生を救うという如来の本願が「いつでもどこでも誰でもたすける行」のお念仏なのです。

【二月のことば】

「名字」は私たちの地獄に響く
阿弥陀のいのち

「高 史明」

作者である高先生は、十二歳の一人息子が自死による今生での別れに深い悲しみをいだかれました。『歎異抄』を縁として親鸞聖人の教えに出遭われます。とある講演の中で「挫折を知らないものが挫折した時が、一番危ない。すぐ死にたくなる。どうかこれらの問題がある時は、そういうときはたすけてくださいと叫びなさい。叫んで、叫んでいくと」仏たすけたまえとは思いうべからず「このようにおっしゃっている蓮如聖人のお言葉に出遭うことができる」「生きる」という世界に捕われ苦悩する若者たちに「生かされているいのち」への気づきを促されています。

【三月のことば】

真の知恵は
そのまま大悲でもある

「上山大峻」

無明（仏教の真理に無知）であるが故に、自分の妄念によって描き出した世界

を真実だと思い込み、そこに捕われながら日々の生活を繰り返しています。その生死の苦海に浮き沈みすることなく真実に向かわせるはたらきこそが、真の知恵であります。つまり阿弥陀仏の苦しみ悩むあらゆるものを見捨てず救うという大悲こそが真の知恵なのです。

【四月のことば】

この私のいのちにいつも
如来のいのちが通い続けている

「藤澤量正」

疑いなく浄土に生まれると思つて、十声でもいいから南無阿弥陀仏と称えてくれ、もしいのち終えて浄土に生まれないようであれば、私はさとりを開きません。という阿弥陀さまの本願の言葉が、生まれてきた意味も知らず、いのち終えていく方向もわからない私には響いてくるのです。

何もわからない愚かな私の煩惱の真つただ中のこの私のいのちに、いつでも、どこでも、どんな時でも、阿弥陀さまは「南無阿弥陀仏」となつてはたらいてくださっているのです。